

## プラトンの『国家』篇におけるムッシケーの位置

### 三 上 章

#### 目 次

#### 問題設定

1. 国家における正義と不正の生成とムッシケー教育論
2. 魂における正義 (= 魂における調和) の生成とムッシケー
  - a. 魂における正義 (= 魂における調和)
    - (1) 魂の三部分に関する論証
    - (2) 魂における正義の生成
  - b. 魂における正義とムッシケー・ギュムナスティケー初等教育
  - c. ムッシケー生涯教育の基礎

#### 問題設定

プラトンが『国家』篇において提起した主要問題は、一個人の魂における正義と不正とがそれぞれ何であるのか、また 両者が魂にもたらす利益は何か、という問題であった。彼は初めに の問題を探求する。探求にあたり彼は、探求を容易ならしめるために、一個人の魂における正義と不正とは何であるのかという問題を、国家における正義と不正とは何であるのかという問題に置き換えて考察することを試みる。国家が生まれてくる次第を言論のうえで観察することによって、国家において正義と不正とが生じてくる様を見きわ

めようというのである。彼は初めに「<sup>(1)</sup> 真実の国家」、**「健全な国家」**が生まれてくる次第を言論の上で観察し、その正義は質素と節制とから生じてくるものであることを明らかにする。彼は次に、「**熱でふくれあがった国家**」、**「贅沢な国家」**が生まれてくる次第を言論の上で観察し、その不正は贅沢と欲望とから生じてくるものであることを明らかにする。プラトンは、**現実に存在する国家を「贅沢な国家」として認識し、それを「健全な国家」に復帰させることを、国家にとっての正義である**と考える。復帰のためには、贅沢国家を浄化する必要がある。浄化のためには、それを**実行することができる国の守護者が必要**である。そのような国の守護者のためには、しかるべき**自然的素質が必要**である。素質を育てるためには、**初等教育段階におけるしかるべき教育が必要**である。しかるべき教育とは、ムッシケー (音楽・文芸) とギュムナスティケー (体育) とによる教育である。それでは、ムッシケーとギュムナスティケーとによる教育は、いかにあるべきだろうか? かくして、**国家における正義と不正の問題は、ムッシケーとギュムナスティケーとによる教育の問題に行き着く。**

プラトンは、初めにムッシケーによる教育について考察し、次にギュムナスティケーによる教育に進むが、議論が展開していく中で、両者は別のものではなく、**いわば広義のムッシケーに包摂される一つのものである**ことが

示される。プラトンのムシケー論は、一言で言えば、ムシケー浄化論である。すなわち、浄化されたムシケーは正しい国家守護者をつくり、正しい国家守護者は正しい国家をつくる、というのである。それゆえ、正しい国家を形成するために、ムシケーの浄化が欠かすことのできない営みとなる<sup>(2)</sup>。巻までの議論から、ここまでは明らかになった。

しかし、正義と不正に関する議論は、以上にとどまらず、さらに 巻に及び、最終巻にまで展開していく。 巻で論じられたムシケー論は、『国家』篇全体の正義論の中で、どのような位置をしめるのか？ これがこれから考察したい問題である。

## 1. 国家における正義と不正の生成とムシケー教育論

プラトンは、ムシケー教育論の考察を始めるにあたり、その考察はたんにムシケー教育論自体のためばかりではなく、『国家』篇全体の探求の目的である、正義と不正とがどのような仕方では国家のなかに生じてくるのかという問題を見きわめるために、役に立つという見通しを述べていた<sup>(3)</sup>。いまや、ムシケー教育論の考察は一応終わったわけだが、その結果は、この問題にどのような光を照らしてくれるだろうか？

プラトンが観るところでは、

市民の百科全書ともいべき叙事詩における、神と人間の不正な描写は、幼児、子ども、若者の魂に不正をつくり出す。

ミメシスによるレクシス、すなわち直接話法のレクシスは、ミメシスを行う人にもそれを受け取る人にも、その魂のエートスに影響を及ぼす。395 C

抒情詩に伴う音楽的要素、すなわちハルモニアとリュトモスは、魂のエートスに大きな影響を及ぼす。398 A -399 E

一方において、悲しみを帯びたハルモニア

(混合リュディア、高音リュディア)は、魂の中に悲しみを抑制できないエートスをつくり出し、柔弱さや怠惰を帯びたハルモニア(イオニア、リュディアのある種のもの)は、魂の中に柔弱で、怠惰なエートスをつくり出す。

以上のような諸ハルモニアは、それと相俟って開発された多絃の絃楽器によって助長されている。しかし、なによりもそのようなハルモニアを助長しているのは、最も「多絃的」な楽器である管楽器(アウロス)である。ハルモニア間の移転を容易にこなせる楽器だからである。

他方において、勇気ある人を真似るハルモニアや節度ある人を真似るハルモニア<sup>(4)</sup>は、魂の中に勇気と節度のエートスをつくり出す。

リュトモスについても、プラトンは同じ論法を当てはめる<sup>(5)</sup>。

まとめると、すぐれたレクシス、ハルモニア、リュトモスは、すぐれたロゴスと相俟って、魂の中にすぐれたエートスをつくり出し、悪いレクシス、ハルモニア、リュトモスは、悪いロゴスと相俟って、魂の中に悪いエートスをつくり出すということになる。400 D-401 A

以上は詩のあり方に関する見解であるが、プラトンがねらいとするのは詩だけではなく、詩によって代表される文化所産全体である。ただし、彼が代表として詩を取りあげたのには、それなりの理由がある。すなわち、詩に伴うところのハルモニアとリュトモスという二つの音楽的要素は、魂の奥深くに浸透していき、何にもまして魂に強い影響を与える力をもっているという認識である。かくして正しいムシケー教育を受けた人は、社会や自然における醜いものを嫌い、美しいものを歓迎するようになる。かかる初等教育段階におけるエートスの形成は、それに続く中等教育段階における理論的な学習のために必要な基礎を提供するのである。この基礎ができあがっ

ていれば、やがて正しい理論と正しくない理論を識別し、正しくない理論を退け、正しい理論を受け入れることが、円滑に行われることが期待できるのである。

悪いものを真似た文化所産は、魂の中に悪いエートスをつくり出し、美しいものを真似た文化所産は魂の中に美しいエートスをつくり出す。つまり、文化所産のあり方が人間と社会のあり方に影響を及ぼすと見るのである。プラトンのムウシケー論は、文化とポリス社会とのあいだの相互関係論である。

『国家』篇が探求する中心問題は、個人の魂における正義とは何かという問題であった。しかし、それは小さい文字を遠くから識別しようとする場合のように、解明することが難しい問題である。それゆえ、問題解明を容易にするために、問題を、国家における正義とは何かという大きな文字に拡大して考察することを、プラトンは提案したのであった。最初に大きな文字を読むことによって、文字に慣れ、やがて小さな文字が識別できるようになることが期待されるのである。かくしてプラトンは、国家の中に正義と不正とがどのようにして生じてくるかを観察し（熱でふくれあがった国家の生成と浄化）、その観察にもとずいて、個人の魂の中に正義と不正とがどのようにして生じてくるかを吟味してきた（ムウシケー教育におけるエートス論）。ムウシケー論が展開されたのは、この観察と吟味との密接な関連においてであった。

プラトンは、ムウシケー教育論をひととおり終えたところで、再び文字のアナロジーに戻る。彼が、卷において展開してきた議論は、国家における正義とは何かという問題に関するものである。それゆえ、小さな文字ではなく大きな文字の識別に関わる話である。大文字を十分に読めるようになったとは、字母を正確に見分けることができるようになったということである。また、水や鏡に文字の似姿がうつし出されている場合、もとの文字

を知ってこそ、その似姿をも知ったといえる。どちらを知るのにも同じ学習を必要とする。つまり、音楽作品をはじめとするあらゆる文化所産において、節制、勇気、自由闊達、高邁さや、すべてそれと類縁のものを、他方それと反対のものを正確に見分けることができるようになったとき、はじめて大文字を十分に読めるようになったといえる。プラトンが、「ムウシケーに優れた者」（μουσικός, 402C）と呼ぶのはそのような人であり、そのような人こそが、国家における正義と不正の本質について知る者である。文化所産の中に諸徳の似姿がうつし出されている場合、まず初めに文化所産の中心をなす音楽作品における諸徳を見分けることに習熟してこそ、その似姿を知ったと言える。音楽における諸徳は、その他すべての文化所産にも反映されているというプラトンの認識が、ここに見られる。

プラトンは、ムウシケー論の必然的展開であるギュムナスティケー論を語り終えた後、再び「ムウシケーに優れた者」（μουσικός）のモチーフに戻る。この度は、「完全な意味でムウシケーに最も優れた者」（τελέως μουσικώτατον）という表現を使う。

国家の中にどのようにして正義と不正が生じてくるかという問題については、プラトンは、不正が生じる原因は、とめどのない欲望と贅沢が原因であり、それゆえ、それらを浄化することが、国家の中に正義を生じさせる道であることを明らかにした。

では、どのようにして浄化を達成することができるかという問題が出てくる。プラトンが、提唱するのはムウシケーとギュムナスティケー教育による方法である。

プラトンは、ムウシケー論を展開する中で、ムウシケー教育もギュムナスティケー教育も、相俟って、魂に関わるものであることを明らかにした。そもそも、国家における正義と不正の生成に関する問題は、個人の魂における正義と不正の生成に関する問題を解明するた

め的手段であった。プラトンは、彼独自のムウシケー論を展開する中で、国家のレベルにおける考察を、いつしか個人の魂のレベルにおける考察に移してきたのであった。

要するに、悪い教育を含め、悪い文化環境によって個人の魂の中に不正が生じ、美しい文化環境によって個人の魂の中に正義が生じてくるというのが、プラトンの見解である。どのようにしてかという活動方式については、プラトンはそのエートス論によってある程度分析した。

それでは、プラトンは、国家における正義の生成に関して、ムウシケー初等教育はどのような役割を担うことができると考えるのだろうか？ いまや理論の上で国家を構築したプラトンは、国家の中を調べることにとりかかる。すなわち、どこに正義があり、どこに不正があるのか。両者はどのように違っているのか。幸福になろうとしている人が、所有していなければならないのは、どちらのほうなのか、ということについて調べることを試みる。正義を発見するために、彼が取る論法は以下のとおりである。すなわち、彼が理論上構築してきた国家は、「完全な意味においてすぐれた国家」( τὴν πόλιν . . . τελέως ἀγαθὴν ,427E) である。このような国家は、知恵、勇気、節制、正義を備えているはずである。それゆえ、これらの一つ一つがどこにあるかを順番に見つけていけば、最後に残ったものが正義だということになるというのである。しかし、われわれはこの論法に疑問をもたざるをえない。まず、最善の国家が備えるアレテーは、はたして知恵、勇気、節制、正義に尽きるのだろうか？ また、これら四つ以外にアレテーは存在しないのだろうか？

事実、プラトンは他の箇所でも、敬虔をアレテーに数えている。そもそも、アレテーは、数学の数字のように消去法を適用することができるような性格のものだろうか？ もちろんそうではないことを、プラトン自身がよく

知っているはずである。しかし、あえて十分な説明をすることを差し控え、彼はまず第一に、国家においてどこに知恵があるかを見つけることに取りかかる。彼が知恵を見付けるのは、国家を守護する人たちにおいてである。彼らは国家において最も少数の階層ではあるが、国家の思慮深い運営はもっぱら彼らに属するのである。プラトンは第二に、国家においてどこに勇気があるかを見つけることへと進む。彼が勇気を見付けるのは戦士の階層においてである。彼らは、恐ろしいものとは何であり、どのようなものであるかについて、法律により教育を通じて形成された考えをあらゆる場合に保持しつづける人たちである。教育によらずに生じたもの、つまり獣や奴隷がもっているようなものは、勇気に似ているかもしれない。しかし、たまたま勇気に見えるようなふるまいだというだけでは、勇気という名で呼ばれるにはふさわしくない。教育によって培われた習慣的な態度や考え方・感じ方から生じるものであればこそ、勇気の名にふさわしいと言えるのである (430 B)。ここでプラトンが教育というのは、ムウシケー初等教育である。彼は、戦士階層に勇気が定着するために、ムウシケー初等教育が果たす役割を次のような比喻で語る。

Οὐκ οὖν οἶσθα, ἦν δ' ἐγώ, ὅτι οἱ βαφῆς, ἐπειδὴν βουλευθῶσι βάψαι ἔρια ὡςτ' εἶναι ἀλουργά, πρώτον μὲν ἐκλέγονται ἐκ τοσοῦτων χρωμάτων μίαν φύσιν τὴν τῶν λευκῶν, ἔπειτα προπαρασκευάζουσιν, οὐκ ὀλίγη παρασκευὴ θεραπεύσαντες ὅπως δεῖξεται ὅτι μάλιστα τὸ ἄνθος, καὶ οὕτω δὴ βάπτουσι, καὶ ὁ μὲν ἂν τούτῳ τῷ τρόπῳ βαφῆ, δευσοποιὸν γίγνεται τὸ βαφέν, καὶ ἡ πλύσις

οὐτ' ἄνευ ῥυμμάτων οὔτε μετὰ  
 ῥυμμάτων δύναται αὐτῶν τὸ ἄνθος  
 ἀφαιρεῖσθαι ἃ δ' ἂν μὴ οἶσθα οἷα  
 δὴ γίγνεται, εἰάντε τις ἄλλα  
 χρώματα βάπτῃ εἰάντε καὶ ταῦτα  
 μὴ προθεραπεύσας.

君も知っていることだが、とぼくは言った。染物師たちが羊毛を紫色になるように染めようと望むとき、まず始めに、数多くの色の中から白色の羊毛に属する一つの素質を選び出す。次に、それにあらかじめ準備をほどこすのだが、できるだけ色の鮮やかさを受け取るように少なからぬ準備をもってそれを取り扱い、その上でやっとならんと染めにかかる。このような仕方では染められるなら、その染め物は深く染められる。洗剤を使わない洗いであれ洗剤を使う洗いであれ、羊毛の色の鮮やかさを取り去ることができない。他方、そのような仕方では染めないなら、他の色を染めるにせよ、下準備をしないで白色を染めるにせよ、どのようなようになるかは、君が知っての通りだ。

プラトンは、「白色の羊毛に属する一つの素質 (μίαν φύσιν)<sup>10</sup>」と言うが、「素質」という用語を使うのは、若者の素質を考えているからであり、「一つの」というのは、戦士階層のための素質を考えているからだろうと思われる。プラトンは、比喩の意味を次のように説明する。

Τοιοῦτον τοίνυν, ἣν δ' ἐγώ,  
 ὑπόλαβε κατὰ δύναμιν ἐργάζεσθαι  
 καὶ ἡμᾶς, ὅτε ἐξελεγόμεθα τοὺς  
 στρατιώτας καὶ ἐπαιδευόμεν  
 μουσικῇ καὶ γυμναστικῇ μηδὲν  
 οἷου ἄλλο μηχανᾶσθαι ἢ ὅπως ἡμῖν  
 ὄτι κάλλιστα τοὺς νόμους  
 πεισθέντες δέξοιντο ὡσπερ βαφὴν.

ἵνα δευσοποιὸς αὐτῶν ἡ δόξα  
 γίγνοιτο καὶ περὶ δεινῶν καὶ περὶ  
 τῶν ἄλλων διὰ τὸ τὴν τε φύσιν καὶ  
 τὴν τροφὴν ἐπιτηδεῖαν ἐσχηκέναι,  
 καὶ μὴ αὐτῶν ἐκπλύναι τὴν βαφὴν  
 τὰ ῥύμματα ταῦτα, δεινὰ ὄντα  
 ἐκκλύζειν, ἢ τε ἡδονῇ, παντός  
 χαλεστραίου δεινότερα οὔσα τοῦτο  
 δρᾶν καὶ κονίας, λύπη τε καὶ  
 φόβος καὶ ἐπιθυμία, παντός ἄλλου  
 ῥύμματος, τὴν δὲ τοιαύτην δύναμιν  
 καὶ σωτηρίαν διὰ παντός δόξης  
 ὀρθῆς τε καὶ νομίμου δεινῶν τε  
 πέρι καὶ μὴ ἀνδρείαν ἐγώγε καλῶ  
 καὶ τίθεμαι, εἰ μὴ τι σὺ ἄλλο  
 λέγεις.

それでは、とぼくは言った。戦士たちを選び出し、ムウシケーとギムナスティケーとによって教育していたとき、われわれもまた同じようなことをできるかぎりしていたのだと想定してくれたまえ。われわれがもくろんでいたことは他でもなく、彼らが、われわれの法律をあたかも染料のようにできるだけ美しく確信し受け入れるようにということなのだ、と考えてくれたまえ。そうすれば、恐ろしいことどもについても他のことどもについても、彼らの考えは、適切な素質と養育を受けているゆえに、深く染まったものになる。そして、次のような強い洗い落としの力をもつ洗剤も、彼らから染料を洗い落とすことができない。すなわち、あらゆる石けんや灰汁よりも強力な働きをもつ快楽、他のあらゆる洗剤より強力な苦痛や恐怖や欲望がそれである。かくして、このような力を、すなわち、恐ろしいことどもとそうでないことどもについて、あらゆる場合に正しい考えを保持する力を、ぼくとしては勇気と呼び、規定したい。君に異論がなければね。

プラトンは、 卷において国家の守護者となるべき者に望まれる自然的素質について論じたが、その結論は、知を愛し、気概があり、敏速で、強い人間であるべきだということであった。そこでは、国家守護者階層と戦士階層との区別を設けず、「国家守護者」として一括りに語った。子どもの段階では、将来、どちらの階層になるかを見きわめることは難しい。しかし、やがては戦士階層になる者たちであっても、そのような素質は必要である。やがては国家守護者階層になる者たちであっても、戦士としての訓練も必要である。戦士の訓練を受けた者たちの中で、知を愛することにおいて秀でた者が、やがて国家守護者として選ばれていくのである。プラトンは、国家守護者の人間形成に関する議論を進めていく中で、やがては国家の守護者を「完全な意味での守護者」(φύλακας παντελείς)と彼らに協力する「補助者かつ援助者」(ἐπικούρους τε καὶ βοηθοὺς)とに区別するに至る。前者が国の支配者階層であり、後者が戦士階層である。この区別に従い、「完全な意味においてすぐれた国家」を理論上構築し終えた今、プラトンは、国家を構成する人々を、支配者階層、戦士階層、および一般民に分けて論じるのである。白い羊毛を紫色に染めるとえは、支配者階層にも戦士階層にもあてはまるように思われるが、プラトンはここでは、「戦士たちを選び出してムウシケーとギュムナスティケーによって教育していたとき」と語る。これにより、プラトンは、ムウシケー初等教育の主な役割を、戦士としての人間形成にあると見ていたことがわかる。さらに、彼らの中で知を愛することにおいて秀でた者が、やがて国家守護者として選ばれてゆくにせよ、まず始めに若者の魂に勇気が備わることが大事なのである。その勇気とは、以上において見たように、「恐ろしいことどもとそうでないことどもについて、あらゆる場合に正しい考えを保持する力」である。

プラトンが『国家』篇 卷と 卷において語ったムウシケー論は、子どもにどのような内容の物語を語り聞かせるべきかという議論から始まった。このロゴス論において、第一に彼は、物語の内容が神々について正しい姿を描くものであるべきことを規定した。子どもが、神々と両親を敬い、同胞を愛する人間に成長するためである。次に彼は、物語の内容が、神々や英雄たちが死を恐れないものであることを規定した。白色の羊毛のような若い魂に、勇気の色をしっかりと定着させるための下準備が、ここに始まるのである。プラトンは、ロゴス論の次に物語をどのように語るべきかという問題に進んだ。このレクシス論において、彼は特に直接話法のレクシスとそれがもつミメシスの力に注意を向ける。子どもがミメシスを見るにせよ、あるいは自分がそれを行うにせよ、それを続けていると、ミメシスが真似る対象の性格が子どもの魂の中に忍び込み、やがては定着してしまうからである。それゆえ、プラトンは、直接話法のレクシスを用いるのを、「勇気ある人々、節度ある人々、敬虔な人々、自由精神の人々」(395 C) などすぐれた人を真似る場合に限る。女性、奴隷、臆病な男、精神に錯乱した者、手職人、水夫長のかけ声、馬のいななき、波の音や雷鳴など、勇者に似つかわしくない物真似はしてはいけない。実際には、プラトンから見て、ホメロスの叙事詩における描写は、勇者に似つかわしくないものであるから、直接話法によるレクシスの使用は最小限にとどめられるべきだということになる。それがプラトンが取り組んできた「戦士たちの教育」(τοὺς στρατιώτας ἐπιχειροῦμεν παιδεύειν. 398 B)なのである。レクシス論に続くハルモニア・リュトモス論も、プラトンがこれまで語ってきたことに合致する。彼が採用するハルモニアは、勇敢な戦士を真似るものか、あるいは節度ある人を真似るものである。リュトモスも、秩序ある生活や勇気ある人の生活

を真似るものでなければならない (399 A - 400 A)。ムウシケー論に続くギュムナスティケー論においても、プラトンは、これまで述べてきた単純なムウシケーに相応するのが最善のギュムナスティケーであると、特に戦士たちのためのギュムナスティケーは単純素朴なものでなければならないとする (404 B)。もちろん、プラトンは、もっぱら勇氣ある戦士の形成だけを考えていたのではない。すでにわれわれが見たように、彼はムウシケー教育とギュムナスティケー教育とを不可分離の一つのものとして論じた。両者が相俟って、子どもの魂の中に気概の要素と知を愛する要素とを調和した状態できり出すと考えるからである。一方において、ムウシケー教育が知を愛する要素をつくり出し、他方において、ギュムナスティケー教育が気概の要素をつくり出すということではない。そのような仕方では、魂における両要素の調和は得ることができない。プラトンは、子どもたちの魂の中に勇氣が培われることを求めた。そして、その勇氣が知恵を愛する愛と一緒に成長していくことを求めたのだと言えよう。

プラトンは第三に、国家においてどこに節制があるかを見つけることへと進む。プラトンは、これまで見てきた知恵や勇氣と比べ、節制は「一種の協和や調和」(συμφωνία τινί καὶ ἀρμονία) に似ているとする。つまり、「節制とは、一種の秩序であり、さまざまの快樂や欲望を抑制することである」(κόσμος πού τις. . . ἡ σωφροσύνη ἐστὶν καὶ ἡδονῶν τινῶν καὶ ἐπιθυμιῶν ἐγκράτεια)。国家に当てはめるなら、国家の中のすぐれた部分が劣った部分を支配している状態が、節制である。人間であるかぎりすべての人には、欲望がある。しかし、少数の、最もすぐれた素質とすぐれた教育を受けた人々がもつ欲望は、「単純かつ適切であり、知性と正しい思わくが伴い、思惟によって導かれる欲望」(τὰς δὲ γὰρ ἀπλᾶς τε καὶ

μετρίας, αἱ δὲ μετὰ νοῦ τε καὶ δόξης ὀρθῆς λογισμῶ ἀγονται, 431C) である。これに対して、大多数の人々の欲望は、そうではなく、思慮を欠く欲望である。それゆえ、多数者のいまだく欲望が、「少数のすぐれた人々の欲望と思慮のもとに」(ὑπὸ τε τῶν ἐπιθυμιῶν καὶ τῆς φρονήσεως τῆς ἐν τοῖς ἐλάττοσι τε καὶ ἐπιεικεστέροις) 支配される必要がある。このような秩序と抑制とをもつ国家が、節制をもつ国家である。先にプラトンは、節制は一種の協和や調和に似ていると語った。それは、節制をもつ国家では、支配する人々と支配される人々との間に、支配と被支配の関係について合意があるからである。このような合意は、支配される人々に節制があり、支配する人々にも節制があることによって可能となる。この点において、節制は知恵や勇氣と異なる。知恵はもっぱら国家守護者階層に属し、勇氣はもっぱら戦士階層に属するものとされ、多数の一般民には必ずしも求められるものではなかった。しかし、節制の場合は、国家守護者であれ、戦士であれ、一般民であれ、すべての人に共通に存在しなければならない。

ὅτι οὐχ ὥσπερ ἡ ἀνδρεία καὶ ἡ σοφία ἐν μέρει τινὶ ἐκατέρα ἐνοῦσα ἢ μὲν σοφὴν, ἢ δὲ ἀνδρείαν τὴν πόλιν παρείχετο, οὐχ οὕτω ποιεῖ αὐτή, ἀλλὰ δι' ὅλης ἀτεχνῶς τέταται διὰ πασῶν παρεχομένη συνάδοντας τοὺς τε ἀσθενεστάτους ταύτων καὶ τοὺς ἰσχυροτάτους καὶ τοὺς μέσους, εἰ μὲν βούλει, φρονήσει, εἰ δὲ βούλει, ἰσχύι, εἰ δέ, καὶ πλήθει ἢ χρήμασιν ἢ ἄλλῳ ὁταφούν τῶν τοιοῦτων· ὥστε ὀρθότατ' ἂν φαίμεν ταύτην τὴν

ὁμόνοιαν σωφροσύνην εἶναι,  
χειρόνός τε καὶ ἀμείνονος κατὰ  
φύσιν συμφωνίαν ὁπότερον δεῖ  
ἄρχειν καὶ ἐν πόλει καὶ ἐν ἐνὶ  
ἐκάστῳ.

なぜなら、節制はそうではない。勇気と知恵はある部分の中に存在し、一方は国家を知恵のあるものとし、他方は国家を勇気のあるものとした。節制はそのようには働かない。それは国家の全体に行きわたっていて、最も弱い人々にも最も強い人々にも、またその中間の人々にも——強い弱いということが、思慮であれ、力であれ、人数の多少であれ、財産であれ、これに類する他の何においてであっても——、全員に同じ歌を全絃の協和のもとで斉唱させるようにするものなのだ。いずれにせよ、このような全員の合意が節制であると主張するならばわめて正しいだろう。すなわちそれは、国家と一人一人の個人の両方において、素質の点で劣ったものと素質の点ですぐれたものとの間の、どちらが支配すべきかということに関する協和なのだ。

今やプラトンが節制について何を強調したかが明らかとなった。節制には三つの要素がある。すなわち、すぐれた者が劣った者を支配すること、諸々の欲望を思慮が支配すること、どちらが支配すべきかということに関する、すぐれたものと劣ったものとの間の合意、である。一番大事な要素は、<sup>98</sup>からには必ずしもは帰結しないのに対して、<sup>99</sup>からにはととが必然的に帰結するからである。これまでのところ、知恵、勇気、節制の三つのアレテーが語られた。国家における三つの階層に関して言えば、守護者階層は知恵、勇気、節制をもつ人々であり、戦士階層は勇気と節制をもつ人々であり、一般民は節制をもつ人々である。いずれにせよ、すべての階層が共通に節制をもつことが

プラトンが構築する国家にとって大事なことなのである。<sup>100</sup>

はたしてこのような合意は、プラトンが描く階層的な社会構造において可能だろうかという疑問が残るかもしれない。被支配階層は、支配者の権威と懲罰を恐れるゆえに、不本意に服従しているのかもしれない。機会があれば反乱を起こすかもしれない。しかしながら、プラトンが考える階層関係は、力と強制によるものではない。プラトンはすでに 卷において、トラシユマコスが主張する権力主義を反駁した。安定した社会が成り立つためには、その成員が自分の素質と能力をわきまえ、自ら進んでその役割を果たすことが必要であるという考えを、プラトンは繰り返し述べてきた。プラトンが言う合意とは、そのような自発的な合意であり、外から強制されたものではない。<sup>101</sup>

プラトンは、国家においてどこに知恵、勇気、節制があるかを順次明らかにした今、いよいよ、国家においてどこに正義があるかを見つけることへと進む。彼は、正義を狩の獲物にたとえる。プラトンのソクラテスは、グラウコンと共に、正義を狩り出すための祈りをささげる。その結果、手がかりとなす足跡をつかむ。つまり、正義はどこか遠くにあるのではなく、これまでに語り合ってきた事柄の中に潜んでいたのである (432 E)。国家の構築にあたり、彼がこれまで繰り返し語ってきた原則がそれである。

ἕνα ἕκαστον ἐν δέοι ἐπιτηδεύειν τῶν  
περὶ τὴν πόλιν, εἰς ὃ αὐτοῦ ἡ φύσις  
ἐπιτηδειοτάτη πεφυκῖα εἶη.

各人は国におけるさまざまな仕事のうちで、その人の素質が本来それにもっとも適しているような仕事を、一人が一つ行わなければならない。<sup>102</sup>



プラトンによると、これが国家における正義である。この意味における正義こそは、国家の中に節制、勇気、知恵を生じさせ、いったん生じた後は、それらのアレテーを存続させるものにほかならない。国家をすぐれた国家たらしめるためには、支配者と被支配者との間の合意が必要である。戦士階層が、何が恐ろしいもので何がそうでないかについて法にかなった正しい考えをもつことも必要である。国家守護者階層が守護に関する正しい知恵をもつことも必要である。しかし、これらのいずれもただそれだけでは、すぐれた国家をつくり出すことはできない。国家の成員一人一人が、自分の仕事だけをして余計なことに手を出さないというあり方が実現されるとき、はじめて国家における節制も勇気も知恵を力を与えられ、相俟ってすぐれた国家をつくり出すことに貢献することができるのである。そういう意味で、一人が一つの仕事に専念することこそが正義であり、この正義は、すぐれた国家の形成に関しては、他の三つのアレテーに匹敵するものなのである。それゆえ、職人や商人などの一般民がその素質がないのに戦士階層に入ろうとしたり、戦士階層の者がその素質がないのに守護者階層に入ろうとしたりして、仕事を取り替えたり複数の仕事を兼ねて行おうとするようになるなら、すぐれた国家は滅びてしまうのである。三階層間の余計な手出しと相互への転換は、国家にとって最大の害悪であり、これこそが不正である。まさにその逆が、正義なのである。

χρηματιστικῶν, ἐπικουρικῶν,  
φυλακικῶν γένους οἰκείοπράγια,  
ἐκάστου τούτων τὸ αὐτοῦ  
πράττοντος ἐν πόλει, τούναντίον  
ἐκείνου δικαιοσύνη τ' ἂν εἴη καὶ τὴν  
πόλιν δικαίαν παρέχοι;

金儲けを仕事とする種族、補助者の種族、守護者の種族が、国家においてそれぞれ自身の仕事を行っている場合、それぞれの本務への専心は、あれとは反対に正義ということになるであろうし、国家を正しい国家たらしめることになるであろう。

これが国家における正義である。しかし、まだこれこそが正義であると確言するときではない。この先、一人一人の個人に当てはめられた場合にも、正義ははたしてそのようなものであるかどうかを吟味する課題が待ち受けている。個人の魂における正義とは何かを解明されてはじめて、正義について確言することができるのである。

国家における正義と不正の生成に関して、ムウシケー初等教育はどのような貢献をすることができるのかということが、われわれの問題であった。すでに見たように、プラトンによると、ムウシケー初等教育は特に、将来戦士になる素質をもつ少年たちに勇気について正しい考えを定着させる役割を果たすのである。この勇気は節制に裏打ちされた勇気であることも、プラトンは明らかにした。節制を伴う勇気に加えて知恵に恵まれた若者たちが、国家守護者になる。かくして、戦士階層は国家守護者階層のよき補助者として、国家守護者が国家を正しく支配できるように協力するのである。国家の中に真の正義が生成するために、ムウシケー初等教育はギュムナステイケー初等教育と相俟って、必要不可欠である。ムウシケー・ギュムナステイケー初等教育がおろそかにされるとき、国家に不正が生成することは避けられない。

## 2. 魂における正義（＝魂における調和）の生成とムウシケー

プラトンが、魂の初期形成に関してムウシケーに重要な役割を与えることについては、

すでに見たとおりである。それでは、その後さらに魂が形成されていき、魂に正義が生成するに至ることについて、プラトンはムッシケーにどのような役割を認めているのだろうか？ ムッシケーの役割は、初等教育で終わったのだろうか？ ムッシケーを初等教育のムッシケーに限るならば、そう言えるかもしれない。しかし、ムッシケーを初等教育のそれに限らず、たえず自己発展していく動的なものとするならば、ムッシケーを役割は初等教育で終わるところか、その後も人の生涯を通して発展していくものと考えなければならないように思われる。また、それがプラトンのムッシケー観であると思われる。本章の目的は、それを明らかにすることにある。まず始めに、魂における正義に関するプラトンの見解を概観し、そのうえで、魂における正義の生成に関して、彼がムッシケーにどのような役割を認めているかについて、明らかにすることを試みたい。

#### a. 魂における正義 (=魂における調和)<sup>(25)</sup>

##### (1) 魂の三部分に関する論証

プラトンは、国家における正義に到達した今、本題である魂における正義に関する議論に進もうとする。この議論は、国家の中に三つの種族があるのに対応して、魂の中にも三つの種類があることを前提とする。しかし、この対応はかならずしも明らかではない。そこで、プラトンはまず始めにこの前提を論証することにとりかかる。彼は論証を、「同一のものが、その同一側面において、しかも同一のものとの関係において、同時に、相反することをしたりされたりすることはできない」という矛盾律に立脚して行く。すなわち、渇きの欲望を例に取り、渇きそれ自体は特定の飲み物を対象とするのではなく、ただ単純に飲み物それ自体を対象とする。さて、のどが渇いていてもあえて飲むことを控える場合

もある。その場合、何かあるものが、渇いているときに魂を逆に引き戻そうとしているのである。それは水を飲むことへと駆りたてている欲望とは別の何かである。矛盾律によるとそうなる。つまり、魂の中には、飲むことを命じる部分があるとともに、それを禁止し抑制する部分がある。それらは互いに性質において異なる。前者は何か衝動のようなものであるのに対して、後者は何か判断のようなものである。そのような性格をもつものとしての禁止と抑制は、理を知るはたらきから生じてくるのでなければならない。したがって、それらは互いに異なった別の要素である。プラトンは、魂の中の理を知るところのものを「理知的部分」(λογιστικόν)と呼び、欲望を感じて興奮するところのものを非理性的な「欲望的部分」(ἐπιθυμητικόν)と呼ぶ(439D)。以上において「部分」という用語を使ったが、プラトンは、魂が時間・空間上部分に分けることができると考えていたわけではない。実際のところ、彼は「部分」(μέρος)という言葉あまり使わない<sup>(26)</sup>。一人の人間は数は一つでも、そのふるまいは複雑である。その複雑さのメカニズムがどのようになっているかは置くとして、一人の中に複雑さがあることはたしかである。プラトンが考えていることは、そういうことではないかと思われる。

それでは気概の部分はどうか？ プラトンは気概の部分を探し出すために、アグライオンの子レオンティオスの例をあげる。レオンティオスは、処刑史のそばに死体が横たわっているのに気づいた。見たいという欲望にとらえられると同時に、このような欲望をもつ自分に対する嫌悪の気持が働き、彼の心の中で欲望と嫌悪の気持が戦った。プラトンは、この例から、「怒り」(ὀργή)は時として欲望と戦うことがあると結ぶ<sup>(27)</sup>。彼は、怒りを広い意味で理解していることがわかる。彼の理解では、野心や競争心のような複雑な気持

よび恥や憤りや復讐心のような道徳的感情なども、怒りなのである。欲望に対する嫌悪の気持、そこには欲望に負けそうになる自分に対する怒りと恥がある。そこには何が正しいことでりっぱなことであるかについての感情があり、このような感情は欲望からは生まれない。そのような意味における怒りは「気概の部分」(τὸ θυμοειδές) から生まれるのである。彼は581 Bでは、気概の部分を「勝利を愛する部分」(τὸ φιλόνηκον) もしくは「名誉を愛する部分」(τὸ φιλότιμον) と呼んでいる。したがって、気概の部分は欲望の部分とは別の種類であるということになる。では、気概の部分は理知的部分とも別の種類のものであることは、どのようにして知ることができるだろうか？ プラトンは、子どもの例を取る。生まれたばかりの子どもの中にも、他者に対して自分を主張する気持が見られる。このような自己主張の気持は、レオンティオスにおける自尊心とは趣が異なり、むしろ衝動のようなものであるが、プラトンの考えでは、これも気概に属するものなのである。ややわかりにくいのが、彼は、根本において、生の衝動もしくは燃料のようなものとして気概を考えているようである。いわば、これから料理されることを待つ何か生の素材のようなものである。このようなものとしての気概は、生まれたばかりの子どもの中にも見られる。さらには、それは理を知らない獣たちの中にも見られる。他方、理を知る働きはそうではなく、ある者たちはいつまでもそれに無縁であり、多くの者の場合はずっと後に生じてくるものである。気概が適切な養育と教育によって培われた場合には、やがて成長してきた理に協力するが、悪い養育によって損なわれた場合には、理知的部分に対立することもある。その例としてプラトンは、「彼は胸を打ち、こう言って心を叱った」(στήθος δὲ πλήξας κραδίην ἠνίκαπε μύθος) という言葉を引用する。オデュッセウスは、

恥知らずの求婚者たちに対して憤り、襲いかかろうとする気持に駆られたが、それに対して、我慢せよと、理性が諭している箇所である。このような場合、悪い教育によって損なわれた気概は、理性の抑止に従わず、自らの思いをとげることもありうるわけである。それゆえ、気概の部分は理知的部分とも別の種類のものであるということになる。以上のことから、プラトンは、国家の場合と同じく、個人の魂の中にも、「同じ種族のものが同じ数だけある」(441C) と結論する。しかし、同じ数だけあるということは論証されたと言えるが、「同じ種族のもの」(τὰ αὐτὰ γένη) があるということのほうは、まだ完全に論証されたとは言えないように思われる。国家の場合は、子ども時代は支配階層と戦士階層の区別がなく、大人になったときに戦士階層の中から支配階層が選ばれるという仕方では区別が生まれる。他方、個人の魂の場合は、気概の部分から理知的部分が生まれるというようなことはない。両者は、初めから別の種類のものである。気概の部分と理知的部分の違いは、戦士階層と支配階層の違いより大きい。その他の点では、国家と個人の魂の対応は、だいたい当てはまっていると言えよう。

プラトンが435 B-441 Cにおいて示したのは、魂には三つの部分があり、それぞれは互いに他の部分に還元できないということである。しかし、ここではそれぞれの部分の機能については詳しい説明を与えていない。詳しく知るためには、『国家』篇のそこかしこにおいて彼が語っている情報を総合する必要がある。一番はつきりした説明は、巻の終わりの部分に見いだされる。「気概」には三つの要素がある。第一に、人間の内にある戦う要素である。人はこれによって相手の攻撃に耐え、相手を攻撃する。第二に、人間の内にある理知的部分そのものではないが、それに似た要素である。人はこれによって不正を憤り、間違っていると感じる時には尻込みを

する。これら二つの要素は、 卷に見いだされる。第三に、人間の内にある競争心と野心を抱く要素である。この要素は、 卷に見いだされる。気概の部分は、支配、勝利、名声を志向する。それゆえ、プラトンはこれを「勝利を愛する部分」あるいは「名誉を愛する部分」とも呼ぶ (581 A)。この部分はいつも理知と知性に従うとはかぎらない。従わないときには、名誉への野心は嫉妬心となり、勝利への渴望は暴力の行使となり、怒る傾向は怒り狂いとなる (586 C-D)。プラトンは、気概の部分を「ライオンの部分」あるいは「蛇の部分」とも呼ぶ。人間がこの部分を不調和に増大させ、緊張させる場合には、強情や気むずかしさが生まれる。他方、この部分をゆるめて弛緩させる場合には、贅沢や柔弱が生まれる (590 B)。この点は、プラトンがすでに 卷においてムウシケーとギュムナスティケーの統合について論じたときに、語ったことである。

「理知的部分」は、三つの要素をもつ。第一に、それは知性であり、ものごとを理解することを可能ならしめる要素である。第二に、それは魂全体の利益を配慮する要素である。他の二つの部分は、それ自身の利益のみに配慮する。たとえば、渴きの欲求は、たとえ器官全体にとって有害であっても、飲むことだけをひたすら求める。理知的部分は魂全体の利益を配慮するゆえに、魂を支配するのに最もふさわしい部分なのである (441E, 442C)。第三に、理知的部分はいわばある種の愛のともいべき要素である。プラトンは、他の箇所ではしばしば「理知的部分」の代わりに「知を愛する部分」(τὸ φιλοσοφῶν) という呼び方をする。これが最初に出てくる 卷では、それは人間の内にあって理解することを愛させ、愛するものを理解しようと欲するようさせる要素である。したがって、それは 卷ではムウシケーを理解することができるようにさせ、美しいものを愛するようさせる

る要素である。理解と愛は共に歩むのである。

卷と 卷ではこの要素は、学問と哲学の源である。人間の内に人間を自然へと引きつけ、それを理解しようと欲するようさせる要素があるからこそ、学問と哲学が生まれるのである。 卷における今われわれが見ている箇所では、プラトンは、それをある場合にいくつかの種類の欲望に対抗する要素として述べている。

「欲望的部分」は、 卷ではすでに見たようにもっぱら身体の欲望であり、それを満たすための金銭欲 (436 A) である。しかし、プラトンは他の箇所では欲求 (ἐπιθυμία) をよいものへの欲求としても語る。あらゆる欲求には理知的活動の要素がある。人間の活動が非常に理知的な方向に向かうとき、そこには欲求の要素がある。 卷では魂の三部分のそれぞれは特有の欲求をもつとされる。このように欲求を広義にとるなら、理性と欲望の対立はなくなり、ほんとうの対立は異なる欲求間の対立ということになるように思われるかもしれない。しかし、プラトンは概して狭い意味で欲望という言葉を使っている。それは何かに惹かれる要素であり、理性の要素はかぎりなく小さい。欲望をこのような意味で考えるなら、理知的部分と欲望的部分の対立はよくわかることである。

このように魂の三部分の性質については、『国家』篇全体から理解する必要があるわけだが、 卷の目的は、魂の三部分のそれぞれについて詳しく調べることではなかった。その目的は、国家の内に三階層があるのに対応して、魂の内にも三部分があることを論証することだった。今やプラトンは、魂の内にも互いに還元されえない三つの異なる部分があることを確立したのだから、当面の目的を果たしたわけである。

(2) 魂における正義の生成

かくしてプラトンによると、国家と個人の対応関係は論証された。それゆえ、国家において三つの種族のそれぞれが「自分のことだけをする」ことが、国家における正しさであるなら、個人においてもそれぞれの部分が「自分のことだけをする」ことが、個人における正しさということになる。すなわち、それぞれの部分の固有の仕事という観点からは、**理知的部分**は、魂全体のために配慮し、**支配**するという仕事**が本来ふさわしい**。気概の部分は、**理知的部分の支配に聴き従い**、その味方となって戦うという仕事**が、本来ふさわしい**。気概の部分がこのような仕事を果たすことができるようなものであるために**大事な**のが、ムウシケー・ギュムナスティケー**初等教育**であった。プラトンは、 卷411 E-412 Aを振り返りつつ次のように語る。

ἀρ' οὖν οὐχ, ὥσπερ ἐλέγομεν,  
μουσικῆς καὶ γυμναστικῆς κρᾶσις  
σύμφωνα αὐτὰ ποιήσει, τὸ μὲν  
ἐπιτείνουσα καὶ τρέφουσα λόγοις τε  
καλοῖς καὶ μαθήμασιν, τὸ δὲ ἀνιείσα  
παραμνθουμένη, ἡμεροῦσα ἀρμονία  
τε καὶ ῥυθμῶ;

だから、われわれが言っていたように、ムウシケーとギュムナスティケーの統合は、それらの部分を協和させることになるのではないだろうか？ 一方の部分を美しい言葉と学習とによって引き締め育み、他方の部分をハルモニアとリュトモスとによって弛め、宥め、穏やかにするという仕方だね。

ここでプラトンは、主にムウシケーが果たす役割について語っているが、ギュムナスティ

ケーの役割を認めていないということではなかった。「引き締める」(ἐπιτείνουσα) という用語は、ギュムナスティケーによる鍛錬を示唆する。彼が考えているのは、ムウシケーとギュムナスティケーの「統合」(κρᾶσις) である。それは先に、410 A-412 Aにおいて見たとおりである。ムウシケーは魂だけのために、ギュムナスティケーは身体だけのためにということではなく、両者は融合され統合されたものとして、相俟って、気概の要素と知を愛する要素に働きかける。その結果、それらの要素が適度な程度まで「締められたり弛められたりすることによって」(ἐπιτεινομένως καὶ ἀνιειμένως)、互いに調和し合う状態が生まれると、プラトンは考えたのであった(412 A)。ムウシケーとギュムナスティケーの統合によって魂の中に気概の部分と理知的部分との協調が生まれ、二つの部分は一丸となって<sup>98</sup>欲望的部分を統治する仕事にあたるのである。プラトンは主に魂に言及しているが、その魂は身体と密接不可分離のものである。二つの部分は、一つの全体である魂と身体のために、最もすぐれた守護者としての働きを行う。二つの部分は協働するのであるが、それぞれの部分は固有の仕事をする。理知的部分は計画審議の仕事を行い、気概の部分は欲望的部分に対して進んで戦いをし、理知的部分の補助者として計画審議された事柄を勇氣をもって遂行するのである(442 A-B)。それゆえ、一人一人の人間において、気概の部分がさまざまな苦痛と快樂の中にあってあらゆる場合に、恐れるべきものとそうでないものについて「もろもろの理」(τῶν λόγων) によって命じられたことどもを守り通す場合に、「勇氣ある」(ἀνδραῖος) 人ということができる。同時に、一人一人の人間において、理知的部分があらゆる場合において、三つの部分にとって、それらの共同体である魂全体にとって、何が利益になるのかということの知識をもち、そ

の人のうちで支配し、指令する場合に、「知恵ある」(σοφός)人ということができる(442-C)。また、一人一人の人間において、理知的部分が気概の部分の力強い協力を受けて欲望的部分を支配することについて、魂のなかに合意ができており、三つの部分に「友愛と協調」(τῆ φιλία καὶ συμφωνία)があり、内乱を起こさない場合、「節制ある」(σώφρων)人ということができる。さらに、一人一人の人間において、三つの部分が、支配することと支配されることについて、それぞれの部分を守っている場合、「正しい」(δίκαιος)人ということができる。そして、プラトンの考えでは、そのような意味における正しい人をつくり出すところのこの力こそが正義なのである。

ἔτι τι οὖν ἕτερον ζητεῖς δικαιοσύνην εἶναι ἢ ταύτην τὴν δύναμιν ἢ τοὺς τοιούτους ἀνδρας τε παρέχεται καὶ πόλεις:

μὰ Δία, ἢ δ' ὅς, οὐκ ἔγωγε.

ではなおも、このような人間・国家たちをつくり出しているこの力より別のものを、君は正義であるとして求めているのかね？

いいえ、ゼウスに誓ってけっして、と彼は答えた。

プラトンが正義の探求にあたり出発点として定めた、国家において一人一人の個人が、自分の仕事だけをして他者の仕事に手出しをしないことが正義なのであるという原理は、正義探しの役に立ったことが、今や明らかになった。ただし、それは正義の実像ではなく「正義の影」(εἰδωλὸν τι τῆς δικαιοσύνης, 443 C) というべきものであった。

τὸ δέ γε ἀληθές, τοιοῦτόν τι ἦν, ὡς ἔοικεν, ἢ δικαιοσύνη ἀλλ' οὐ περὶ τὴν

ἔξω πράξιν τῶν αὐτοῦ, ἀλλὰ περὶ τὴν ἐντός, ὡς ἀληθῶς περὶ ἑαυτὸν καὶ τὰ ἑαυτοῦ, μὴ ἑάσαντα τὰλλότρια πράττειν ἕκαστον ἐν αὐτῷ μηδὲ πολυπραγμονεῖν πρὸς ἀλλήλα τὰ ἐν τῇ ψυχῇ γένη, ἀλλὰ τῷ ὄντι τὰ οἰκεία εὐ θέμενον καὶ ἀρξάντα αὐτὸν αὐτοῦ καὶ κοσμήσαντα καὶ φίλον γενόμενον ἑαυτῷ καὶ συναρμόσαντα τρία ὄντα, ὡςπερ ὄρους τρεῖς ἀρμονίας ἀτεχνῶς, νεάτης τε καὶ ὑπάτης καὶ μέσης, καὶ εἰ ἄλλα ἄττα μεταξύ τυγχάνει ὄντα, πάντα ταῦτα συνδήσαντα καὶ παντάπασιν ἕνα γενόμενον ἐκ πολλῶν, σώφρονα καὶ ἡρμοσμένον, οὕτω δὲ πράττειν ἤδη, ἐάν τι πράττη ἢ περὶ χρημάτων κτήσιν ἢ περὶ σώματος θεραπείαν ἢ καὶ πολιτικόν τι ἢ περὶ τὰ ἴδια συμβόλαια, ἐν πᾶσι τούτοις ἡγούμενον καὶ ὀνομάζοντα δικαίαν μὲν καὶ καλὴν πράξιν ἢ ἂν ταύτην τὴν ἔξιν σφῶζῃ τε καὶ συναπεργάζηται, σοφίαν δὲ τὴν ἐπιστατοῦσαν ταύτῃ τῇ πράξει ἐπιστήμην, ἀδικον δὲ πράξιν ἢ ἂν αἰὲ ταύτην λύη, ἀμαθίαν δὲ τὴν ταύτῃ αὐ ἐπιστατοῦσαν δόξαν.

真実とはいえば、正義とは、どうやら何かそのようなものであったようだが、自分自身の仕事にたいする外的な行為に関するものではなく、内的な行為に関するものであり、真の意味で自分自身と自分自身の仕事に関するものなのだ。自分自身のなかにあるそれぞれ

のものに他のものの仕事をすることを許さず、また魂のなかにある諸種族に互いに干渉することも許さず、真に自分の家のことを整え、自分で自分を支配し、秩序づけ、自分自身の友となるのだ。三つあるそれらの種族をちょうどハルモニアにおける最高音・最低音・中音の三つの音程区分のように完全に調和させ、もし中間に何か他の音程区分があれば、それらすべてを結び合わせ、多くのものではなく完全に一つのものになるのだ。節制があり調和を得たものとしてね。そのようにしてようやくことを行うのだ。金銭を得ることに關しても、身体の世話をすることに關しても、また政治のことに關しても、個人的な取引に關しても、何かをする場合にはね。そうしたすべてのことにおいて、そのような状態を保全するような、またそれを完成するのに役立つような行為を正しく美しい行為と考えてそう呼び、そのような行為を監督する知識を知恵と呼ぶのだ。逆に、そのような状態を滅ぼすような行為を不正な行為と考えてそう呼び、またそのような行為を監督する思わくを無知と呼ぶのだ。<sup>98</sup>

プラトンによると、このような意味における正義は、正しい個人と正しい国家をつくり出す「力」(δύναμις)である。これが「節制」(σωφροσύνη)と違う点である。節制は、魂の三部分間における支配することと支配されることに関する調和・合意ではあるけれども、いまだ力にはなりえない。正しい個人と正しい国家をつくり出す力は、魂における正義の生成にまたねばならない。

プラトンが『国家』篇において探求し続けてきた問題は、一個人の魂における正義と不正とがそれぞれ何であるのか、また両者が魂にもたらす利益は何か、という問題であった。彼はこの問題を解明するために、初めに、国家においてどのように正義と不正が生じてくるのかを観察し、次に、個人の魂において

どのように正義と不正が生じてくるのかを観察した。このような観察の結果、彼は魂における正義と不正が何であるかを明らかにした。

の問題を解明したわけである。

#### b. 魂における正義とムウシケー・ギュムナスティケー初等教育

では、魂における正義とは以上のものであり、その生成過程が以上のものであるなら、ムウシケー初等教育は、魂における正義の生成に対してどのような貢献をするのだろうか？

これまで見てきたことから、プラトンのムウシケー初等教育は、主として魂における気概の部分の形成に貢献することが明らかである。気概は生まれつき人間の魂に備わっている要素である。それに対して、理性は子どもが成長するにつれて後になってから芽生えてくる要素である。やがて理性が成長してきたとき、気概は理性の味方となり補助者とならなければならない。欲望が人を不正へと強制するとき、理性が欲望と戦い支配するのを助けるためである。しかし、生まれつきの気概は、そのまま理性の補助者となるとはかぎらない。むしろ、放っておくなら、かえって欲望の味方となり、理性に逆らうことも起こりうる。気概は双方に傾きうるものであるから、できるだけ早くから教育することが大事なのである。プラトンは、『国家』篇ではムウシケーの初等教育について論じるが、『法律』篇では幼児にまで、さらには胎児にまでさかのぼってムウシケー教育を論じるのは、そのためである。<sup>99</sup> 理性の教育も大事であるが、理性が生まれてくるのは幼児期から少年期にかけてであるから、順序としては気概の教育よりもそれはずっと後になってのことである。プラトンが 巻と 巻で展開するムウシケー初等教育論は、魂における正義の生成に関して言えば、主に気概の部分の教育を目指していると言える。 巻におけるムウシケーとギュムナ

スティケーとの統合を論ずる教育論も、当然ながら、子どもの成長において後から成長してくる理性を視野に入れて論じているわけだが、ここでもプラトンが主に考えていることは、魂における気概の部分の教育であると思われる。巻において見てきた魂におけるアレテーの生成に関して言えば、気概の教育は主に節制 (σωφροσύνη) の形成に関わると言える。節制とは、魂の内なる三部分の間の「友愛と協調」(τῆ φιλία καὶ συμφωνία, 442 C) であった。すなわち、知的部分こそ支配する部分であり、気概の部分と欲望的部分は支配されるべき部分であることについて、支配する部分と支配される二つの部分に合意があり、支配される二つの部分が支配する部分に対して内乱を起こさない状態、これが節制であった。しかし現実には、このような合意と平和はしばしば破られる。欲望的部分が分不相応に支配権をにぎろうとするようなことが起こるのである。そのような場合、気概的部分は知的部分の味方となって、欲望的部分と戦わなければならないのであるが、そうではなく欲望的部分に加勢して知的部分に対して戦いをしかけることが起こりうる。そうなると、それは魂における三部分間のいわば内乱であり、欲望的部分と気概の部分の本務逸脱であり、余計な手出しである。その結果、不正、放埒、卑怯、無知などあらゆる悪徳が生まれてくるのである (442 B)。もちろん魂における支配者は知的部分であるが、それは生まれながら確立しているものではなく、子どもが成長するにつれてやがて芽生えてくるものである。ムウシケー初等教育はその芽生えを育むわけであるが、知的部分を十分に教育するのは、中等教育以降の役割である。プラトンが巻において提示する哲人統治者の教育がそれである。彼はそこでは、哲人統治者のカリキュラムとして数学的緒学科と哲学的問答法(ディアレクティケー)を提示する。しかし、いきなり知的部分の本

格的教育に飛ぶわけにはいかない。子どもの発達段階に合わせて、初等教育段階では気概の部分の教育に重点を置く必要がある。

プラトンは巻において、子どもに対するムウシケー教育における「言葉」について語るにあたり、神々と両親を敬うことと、友愛を軽視してはならないことを語るが、次に彼が大事なこととして語るのが、気概に関わることであった。子どもたちは、勇気ある人間の話の聞かねばならない (386 A)。また、節制を養うのに役立つ話を聞かねばならないのである (389 D-390 A)。次いで、プラトンは「レクシス」について論じるときにも、ミメシスは勇気ある人、節度ある人を真似るべきであると語った (395 C)。レクシスは、真似を特徴とする直接話法よりも真似を含まない単純な叙述であるべきであるとも語った。この主張の背後には、国家の守護者は真似の達人な人間であるべきかという問いかけがあった。一人がその人固有の仕事ですればりつぱにできるが、一人で多くの仕事をしようとすれば失敗するというのである (394 E)。この一人につき一つの仕事という原則は、やがて

巻の魂の三部分論に連なっていくのである。さらに、プラトンは抒情詩におけるハルモニアとリュトモスについて論じるときにも、勇気と節度を真似るものを採用すべきだと主張した (399 AB, 399 E-400 A)。この主張も、気概の部分の教育につながる。プラトンがムウシケー初等教育論の延長として語るムウシケー・ギュムナスティケー論においても、彼の主眼点は気概の部分の教育と魂における節制の形成ということにある。ギュムナスティケーの目的は、単に身体を鍛錬することではなく魂に生まれつき備わっている気概的な要素 (τὸ θυμοειδὲς τῆς φύσεως) を目覚めさせるためである。ムウシケー教育の目的も、単に魂の情操を養うためではなく、気概の部分の緊張を適度に弛めることによって粗暴と頑固な性格になることを防ぎ、勇気ある性格に教



育するためである。つまり、ムウシケーとギュムナスティケーは相俟って、魂の内なる気概的な素質と知を愛する素質を適度に調和させ、節制と勇気を生み出すことを目的とするのである (410 B - 412 A)。

ただし、「気概的な要素と知を愛する要素」( τὸ θυμοειδές καὶ τὸ φιλόσοφον ) の調和といっても、初等教育の段階にある子どもの魂における調和である。本格的な調和の達成は、哲人統治者の形成のために用意されている中等教育以降の教育にまたねばならない。しかし、初等教育の段階におけるそれら二つの素質の教育は、哲人統治者教育のために欠かすことができない課程である。この課程を飛び越えていきなり数学的諸学科の学習に進むことは、魂の発達における自然に逆らうことになる。

### c. ムウシケー生涯教育の基礎

一見したところでは、プラトンがムウシケーの役割を積極的に語るのは、 巻においてのみである。 巻ではギュムナスティケーについては、それ自体は生成消滅するものに関わるものであるから、「真実在への上昇」( τοῦ ὄντος οὐσαν ἐπάνοδοσιν ) としての「まことの哲学」( φιλοσοφίαν ἀληθῆ ) に魂を転向させることについては力をもたないと語る。(521 C - E)。初等教育における抒情詩としてのムウシケー教育についても、限界を指摘する。すなわち、それは「習慣づけによる教育」( ἔθει παιδεύουσα ) であり、ハルモニアを用いて用いて一種のよきハルモニア感覚 ( εὐαρμοσίαν ) を授け、リュトモスを用いてよきリュトモス感覚 ( εὐρυθμίαν ) を授けるにとどまらざるをえない。いまだ、「学問的知識」( ἐπιστήμην ) を授けるものでない (522 AB)。さらに 巻ではムウシケーの暗い面が語られることになる<sup>100</sup>。しかし、プラトンはここでムウシケーに見切りをつけた

と考えてはならない。522 A でプラトンは、ここで論じているムウシケーについて「われわれが先に述べた範囲でのムウシケー」( μουσική ὅσῃν τὸ πρότερον διήλθομεν ) と、ムウシケーの範囲を限定している。子どもが学ぶムウシケー、特にムウシケー初等教育における抒情詩に範囲を限定すれば、ムウシケーにはそのような限界があるということなのである。

プラトンは、哲人統治者の教育を生涯にわたる教育として考えている。それは音楽・文芸としてのムウシケーを学ぶ幼児・初等教育にはじまり、数学的諸学科を学ぶ中等教育を経て、哲学的問答法を学ぶ高等教育にまで進んでいく。彼は、この一連の課程全体をムウシケー学習としてとらえているのではないかと思われる。彼は 巻531 DEにおいて、数学的諸学科を「前奏曲」( τοῦ προοιμίου ) と呼び、哲学的ディアレクティケーを「本曲そのもの」( αὐτὸς ὁ νόμος ) と呼ぶ。そうすると、音楽・文芸としてのムウシケーは、さしずめ演奏のための基礎練習ということになるであろう。プラトンにとっては、音楽・文芸がムウシケーであるなら、数学的諸学科もムウシケーである。数学的諸学科がムウシケーであるなら、哲学的問答法もムウシケーなのである。このようにムウシケーは、魂が真実在に向かって上昇していくのに対応して、自らをより高次なものへと変容していく。プラトンは 巻において、理想国の実現のためには哲人統治者が必要であることを提案し、続く 巻499 Dにおいて次のように語る。

ἡ εἰρημένη πολιτεία καὶ ἔστιν καὶ γενήσεται γε, ὅταν αὐτὴ ἡ Μοῦσα πόλεως ἐγκρατῆς γένηται.

これまで語られてきた国制は、このムウサの女神が国家の支配者となるときにはいつでも実現したし、実現しているし、実現するで

あろう。

「ムウサの女神」( ἡ Μοῦσα )とは、すぐ前に言及される、神の靈感を受けた人が愛し求める「真実の哲学」( ἀληθινῆς φιλοσοφίας, 499 C) を指す。 卷548 BCにおいてもプラトンは、「真のムウサには、ロゴス (理論的知性) とピロソピア (愛知) とがお供として伴う」( τὸ τῆς ἀληθινῆς Μοῦσας τῆς μετὰ λόγων τε καὶ φιλοσοφίας ) と語る。この意味でのムウサの営みとしてのムウシケーとは、哲学であるということになる。549B では彼は、「ムウシケーと練り合わされたロゴス (理論的知性)」「(λόγου μουσικῆ κεκραμένου)」こそがアレテーの最大の守り手であると語る。これが魂の中にいったん形成されると、一生その人の中に住みつづけて、アレテーを保全する力となる。プラトンは、音楽・文芸のムウシケーと哲学のムウシケーを分離することのできない一つのものと考えているのである。

卷591 D では、「真の意味のムウシコス (音楽家、教養ある人)」「(τῆ ἀληθείᾳ μουσικός) とは「魂の内なる協和音のためにハルモニアをつくる人」( τῆς ἐν τῇ ψυχῇ ἑνικῆ συμφωνίας ἁρμοττόμενος ) であるということになる。プラトンは、哲学の教育を生涯全体に渡る生涯教育として構想し、その始まりとして初等教育におけるムウシケー教育を位置づけているのである。その観点から、 卷498 B-C の次の言葉がもっともよく理解できるのである。

μειράκια μὲν ὄντα καὶ παιδάς  
μειρακιώδη παιδείαν καὶ  
φιλοσοφίαν μεταχειρίζεσθαι, τῶν  
τε σωμάτων, ἐν ᾧ βλαστάνει τε καὶ  
ἀνδροῦται, εὖ μάλα ἐπιμελεῖσθαι,  
ὕπηρεσίαν φιλοσοφία κτωμένους  
προϊούσης δὲ τῆς ἡλικίας, ἐν ἣ ἡ  
ψυχὴ τελεοῦσθαι ἀρχεται,  
ἐπιτείνειν τὰ ἐκείνης γυμνάσια

ὄταν δὲ λήγῃ μὲν ἡ ῥόμη,  
πολιτικῶν δὲ καὶ στρατειῶν ἐκτὸς  
γίγνηται, τότε ἤδη ἀφέτους  
νέμεσθαι καὶ μηδὲν ἄλλο πράττειν,  
ὅτι μὴ πάρεργον, τοὺς μέλλοντας  
εὐδαιμόνως βιώσεσθαι καὶ  
τελευτήσαντας τῷ βίῳ τῷ  
βεβιωμένῳ τὴν ἐκεῖ μοῖραν  
ἐπιστήσειν πρέπουσαν.

若者や子どもの中には、若い年ごろにふさわしい教養と哲学 (愛知) を学ぶべきだし、身体が成長して大人になりつつある期間には、身体のことにとくによく配慮して、哲学に奉仕する基盤を確保しなければならない。しかし、年齢が進み、魂の発育が完成しはじめたならば、魂の訓練に力を入れるべきである。そして、やがて体力が衰えて、政治や兵役の義務から解放される年齢になったならば、そのときこそはじめて、聖域の羊たちのように仕事から解放されたものとしてひたすら (哲学の) 草を食まねばならない。暇なときの営みは別として、それ以外のことは一切しない。こうして彼らは幸せに生きることになり、生を終えたときには、自分の生きてきた生にふさわしいかきこでの運命をつけ加えることになるだろう。

プラトンが言う「若い年ごろにふさわしい教育と哲学」とは、初等教育において学ぶ音楽・文芸のムウシケーである。彼がそれを「哲学」( φιλοσοφία ) と呼ぶことができるのは、生まれつきの素質があり、適切な教養を身に着けた若者がやがて学ぶことになるディアレクティケーとの連続性を認めるからであろう。ムウシケーの生涯教育が目指す究極の目標は「善のイデア」( ἡ τοῦ ἀγαθοῦ ἰδέα , 505 A) を観照することであるが、いきなり太陽を見ることのできないのと同じく、いきなり善のイデアを観照することはできない。

慣れというものがどうしても必要である。最初に影を見ることをし、次に、水にうつる人間その他の映像を見ることにし、その上で、その実物を直接見るようにすればよい。その後で、天体に目を移すことになるわけだが、まず夜に星や月の光を見ることをすればよい。そのようにして行って、最後に、太陽を見ることができるようになるだろう。魂が上方の世界の事物を見ようとするならば、音楽・文芸のムウシケーから初めて、数学的諸学科のムウシケーに進み、さらにはディアレクティケーのムウシケーに進むという仕方で段階を踏みながら、真実在の観照に慣れていく必要がある (516 A)。このようにして魂の内なる「神的な器官」( *θειότερου τινός* ) ともいうべき知性が、まだ子どものうちから、生成界に属する附着物を叩きおとされ、純化され続けるなら、やがて真実在への魂の向け変えとしての教育であるディアレクティケーになめらかに移行することができるのである (519 AB)。『弁明』のソクラテスは、あの世に行ったなら知者と言われた人たちと哲学的問答をしたいという希望を語った<sup>13</sup>。『パイドン』において、死をまじかに控えたソクラテスは、詩作を行っていることに対して、その理由をケベスに質問された。ソクラテスは、「ムウシケーを作り、それを業とせよ」との神のお告げを受けたので、自分は「哲学が最高のムウシケーである」( *φιλοσοφίας μὲν οὐσίας μεγίστης μουσικῆς* ) と考え、それを行ってきた、と答えた。ソクラテスの愛知の営みはあの世に行ってからでも続きそうである。『国家』篇 卷616 B - C のエル物語によると、上方の世界では三人の女神たちが、セイレンたちのハルモニアに合わせて賛歌を歌っていた ( *ὕμνῳ πρὸς τὴν τῶν Σεϊρήνων ἁρμονίαν* ) とある。ソクラテスとプラトンにとって、この天上の音楽は真実在を見ることを可能にさせるまことの哲学に他ならないであろう。

[注]

- (1) 368C-369A
- (2) 399E
- (3) 376D
- (4) グラウコンは、そのようなハルモニアとして、ドーリスとプリュギアを言及するが、ソクラテスは特定することを避け、原則を述べることにとどまる。399A-B
- (5) 366E-401A
- (6) 401D-402A
- (7) 368C-369A
- (8) 402B-403C
- (9) 402B-C
- (10) Cf. *Laches*, 199D ; *Meno*, 78D ; *Protagoras*, 329 C ; *Gorgias*, 507B. Cf. Julia Annas, *An Introduction to PLATO'S REPUBLIC* (Oxford University Press, 1982) : 110-111. Nicholas Pappas, *Plato and the Republic* (Routledge, 1995) : 74-75 ; Sean Sayers, *Plato's Republic An Introduction* (Edinburgh University Press, 1999) : 56-57.
- (11) 429D-E
- (12) この所を多くの訳者は、「白い羊毛」とだけ訳しているが、*μίαν φύσιν τὴν τῶν λευκῶν* は、文字通りに訳するのがよいと思われる。Cf. Allan Bloom, *The Republic of Plato* (BasicBooks, 1991) : 107, ' the single nature belonging to white things ' .
- (13) 429E-430B
- (14) 374E-376C
- (15) 414B
- (16) 430E
- (17) 430D-431D
- (18) 431E-432A
- (19) Cf. James Adam, *The Republic of Plato* (Cambridge University Press, 1965) : 236.
- (20) Cf. Sean Sayers, *Plato's Republic An Introduction* (Edinburgh University Press, 1999) : 60-61.
- (21) 433A
- (22) 433B
- (23) 434B-C

- 24) 434C
- 25) 434D-499A
- 26) 434E-441C
- 27) プラトンは444B3に至って初めて μέρος という言葉を使う。Cf. Julia Annas, *An Introduction to PLATO'S REPUBLIC* (Oxford University Press, 1982) : 124.  
プラトンは『法律』 . 863Bにおいて、魂の三部分について「それが何らかの状態であるか部分であるかはともかく」( εἴτε τι πάθος εἴτε τι μέρος ) と語っている。
- 28) 440A
- 29) Cf. Nicholas Pappas, *Plato and the Republic* (Routledge, 1995) : 84.
- 30) Cf. Annas, *An Introduction to PLATO'S REPUBLIC* : 127は, ' raw feelings which can be trained into something more complex ' というふうに関し表している。
- 31) *Odyseia*, 20. 17-18.
- 32) 441A-B
- 33) 以下の議論については, Cf. R. L. NETTLESHIP, *LECTURES ON THE REPUBLIC OF PLATO* (MACMILLAN, 1955) : 156-159 ; Sean Sayers, *Plato's Republic An Introduction* (Edinburgh University Press, 1999) : 70-72.
- 34) 410C-412B
- 35) 442A
- 36) 両者は、双数形 τοῦτοις で語られている。
- 37) 443B
- 38) 432D, 433A-B
- 39) 443C-444A
- 40) 『法律』 , 卷
- 41) 卷のムウシケー論と他の巻におけるプラトンの主張との関係については, Cf. N. R. Murphy, *THE INTERPRETATION OF PLATO'S REPUBLIC* (OXFORD UNIVERSITY PRESS, 1951) : 25.
- 42) 499D
- 43) *Apologia*, 41A-C

[Abstract]

## The Place of μουσική in Plato's *Republic*

Akira MIKAMI

This article purports to clarify what kind of place the μουσική which Plato argues in books II and III, occupies in the whole of *The Republic*. The learning of the μουσική in primary education contributes to the character formation of children who will be future warriors in that it settles the right opinion of courage into their souls. Plato shows that justice in the soul consists in that each part of the soul, namely, reason, spirit, and appetite, does its own work and doesn't meddle in the others. His opinion invites opposition from scholars. But it seems to work as far as the problem of how justice is made in the soul is concerned. According to his understanding, the μουσική contributes to the formation of courage and moderation (σωφροσύνη) in the soul. The contemplation of the idea of the Good requires the learning of mathematical subjects and the philosophical dialectic. But one cannot go to them without first learning the μουσική in the elementary education. The μουσική in books II and III occupies a far more important place than is usually thought in that it is an indispensable prerequisite to the curriculum for the expected philosopher king.

